

京鹿子

昭和三十年五月一日発行
第百二十五号(毎月一回一日発行)

5月号

鈴 鹿 呂 仁

拾 掬 集 その三十二



鳥 帰 る 汀 に 寄 せ る 湖 の 黙
時 差 の な き 一 枚 の 空 鳥 帰 る
水 仙 忌 一 句 成 さ ず ば 百 句 な し
口 数 の 多 き 蟲 か な 千 日 手
振 り 出 し に 戻 す 賽 の 目 蝮 の 道
花 満 ち て 天 姿 を そ な ふ 老 樹 か な



花の鳥啄む空をひらがなに
洛中へ花の助走の疏水縁り
三門の一景として花枝垂る
河馬笑ふ花のひとひら身じろがず
小象囓ふ春水の高く高く
鐵路鏗ぶ蹴上の空や草萌ゆる
蝶生るる双子姉妹のをんな坂
西郷せごどんの空はまつたり花の駅

(上野公園)



近詠

陶狸

鈴鹿 仁



たんぽぽの絮の自在や野のひかり
永き日や無い袖振れぬ陶狸
鳥帰る比叡は京の鬼門筋
野風呂忌やひとすぢ通す嵯峨の風
春愁の風をあしらふ象の鼻

—
近 詠
—

和田 照海

忘れ潮

反芻は糸遊ばかり見張り山羊

忘れ潮砦のごとき島の宿

島宿の蚕の誇りの海鞘の鍋

料峭や渡船の椅子の座り艶

一湾をみな出払つて春鷗



松本 鷹根

殉死の碑

山峡の水の滾りに咲く辛夷

切株に生駒見渡す初音あり

白梅のありて紅梅風馴染む

傘松に弥生の雫しとしと

殉死の碑堅田内湖に陽炎へり



近 詠

塩貝 朱千

春 灯

さくらに芽菩薩の瓔珞咲き満つる

小流れに身を清むかに落椿

雪解滝耳を澄ませば心清む

みほとけの朱唇を濡らす春灯

水温む木橋木の音たて渡る

英華採集

蛤の泡ぶくぶくと世を拗ねて

京都 山根 淑子

蛤の語源は、浜辺に生息していて形が栗に似ているところから「浜栗」となったと言われている。又、蛤の貝殻は貝合わせの遊びに使われ、違う物同士はびったり合わない性質がある。この食い違いを「はまぐり」の倒語として「ぐりはま」と呼ばれ、訛って「ぐれはま」という。「ぐれ」は「ぐれる」に通じ「蛤の世を拗ねて」は、現代の若者の行き場のない心の屈折感と重なることが出来るのではないだろうか。

沈む銭浮く銭のあり初戎

福山 中 島 三喜子

初戎は、正月十日の初恵比寿のこと。戎神は福の神として商人の信仰が厚く戎笹に縁起物を付けてよくお店に飾られて商売繁盛の祈願をされている所が多い。「損して得とれ」という言葉があるが、利得を優先すると結果的に損をする喩えで「お金」は有効に使わなければならない事を戒めている。掲句の「銭」という字は、商売上の隠語の意味合いが強く出ており銭の浮き沈みには、前記の喩えがよく表されていると言える。

始まりは東風をうながす風見鶏

高槻 今 井 洋 子

暦の上では、春は立春からであり立春は節目を示す季語となっているが、我々は春先になって吹き始める東風を感じると漸くの春の訪れに心和ませることになる。風見鶏は、風によってその役割を担うもので風が吹かなければ何の意味も持たないものであるが、掲句の「風見鶏」は春が早く来るように東風を促して本来の自分を見せようとしている。逆の発想をしたことと「風見鶏」という物に語らせることによって佳句となった。

神麓集

青き踏む 藤岡紫水

ふるさとの土に情あり青き踏む
猫の妻ピカソのごとく変貌す
雲一つ動かぬ空や梅日和
ぬるき湯に二度目の不覚春の風邪
旅三日一日ひとひは春の雪に添ひ

花蘇枋 沼田巴字

嵯峨野路のつま先上り著莪の花
すかんぼや人には告げぬ愁ひもち
天空に濃き色として藤の花
花蘇枋冷たくあれど恋は恋
われ乗せて回れや回れ鉄線花

梅林 丸井巴水

冬眠の覚めしものより餌を漁る
酒よりも美味し蛇の目の寒の水
待つことも待たるる事もなき雪夜
病歴を一つ加へて坐す春野
姥捨ての如く梅林抜けて行く

私淑 植村蘇星

八合目からの人生春隣
大根引く八十年の重みかな
一系の極む私淑や野風呂の忌
韻文に魅せられ鼓動木の芽風
縁結び多き峠や木の芽風

神麓集

みどり冷え

北川 孝子

頬杖の視野をかすめて鳥の恋
みどり冷えまますのやう一人棲む
喉飴のゆつくり溶けてさくら二分
囀りの一樹に浮遊ごころかな
行く雲の影も道づれさくら待つ

石路の花

直江 裕子

初鳴きの向かうほんとの空がある
雪の階下りるピアノを弾くやうに
あたためた言葉を口に石路の花
泣き顔を映し若水溢れしむ
うれしい程黙る父の背梅一輪

立春の水

高木 晶子

がらくたを宝の山に冬籠
人日の改札口は川となる
薄氷の下に閉ぢこめ恥多し
節分の鬼も失念一つ家
立春の水全身へ行きわたる

真菰の芽

伊藤 希眸

ポケットの中をきれいに春立つ日
雪解風さらさら赤く顔洗ふ
芽吹きかもざわめく森は生きてゐる
碑を流る万葉の仮名春陽燦
生と死の水は同源真菰の芽

神麓集

まゆ抱きに

木戸渥子

春愁のぐらついてゐる下半身
春光やきのふ識らぬ児まゆ抱きに
哲学を実践中の浮寝鳥
陰干しにとは面倒臭さ懐炉抱き
険約も純潔も死語なごり雪

葉牡丹

奥田筆子

葉牡丹や私の部屋の四面書架
コンビニに一匹狼集合す
戦後処理伴侶にもどり林檎むく
結論を宙ぶらりに青橙
人日や地図には載せぬ狼煙山

ふりつむ

井上菜摘子

とこしへに航海なかば宝船
笑ふ種もつきて三日の皿小鉢
鳩尾をふりつむ雪やカフェラッテ
身の内の野面の果てや冬夕焼
電子辞書の枯野にボール置いておく

初蝶来

村田あを衣

等身大の鏡を抜けて初蝶来
機音は雪降る音の紡ぎ詩
永き日の指へなじませゆく紙縫
薄氷を透かすむこうの遠山河
春隣御苑の地図を訪ひ余す



京鹿子集

鈴鹿呂仁選

初霞羽化するための深ねむり

どんどの火魔女伝説を上書す

自然体で生きむ余生の初湯かな

柳生流生まれし村も春立てり

補助輪のとれし自転車草萌ゆる

骨壺のことり雪道転ぶなよ

さざんくわの咲き継ぐ日日や納骨す

辛うじてまだ現役の赤手套

恐竜のたまご転がる春立つ野

半自動ドアよりうぐひすの初音

京田辺 山中志津子

京都 井尻 妙子

望楼の空大いなる春隣

内角の低目高目と物芽吹く

梅が香の帯にゆるみのなかりけり

早春野へ白き羽毛を付けてゆく

料峭や波のまにまのしじら織り

決意とはなべてひそやか冬桜

うぶすなを追はれし鬼や冴返る

涅槃西風この身に楯も鎧もなし

幸せを小出しに三寒四温かな

心身の継ぎ目知らざる雨水の日

城陽 鷺山 珀眉

京都 片山 熙子

春隣上寿に未来なしとせず
寒四郎人口過密の星の上

福 山 亀井 福恵

入日やや力を抜きて五日かな
息白しスクランブルの交差点

福 知 山 西村 滋子

折り合ひのつかぬこの世の寒四郎
たんぽぽの絮とび去りし淡き恋

木の陰のベンチ夕べの別れ雪

泥吐けば吾が身の重し春の泥

生も死も神なすままに寒椿

真実を知るもほどほど雪ばんば



蛤の泡ぶくぶくと世を拗ねて

黒髭をゆたかにほだき卒業す

初恋の眼に戸惑へり春の鹿

春めきてひもとく新書匂ひ立つ

沈む銭浮く銭のあり初戒

酷寒やちりめんじゃこの微塵の眼

福 山 中島三喜子

京 都 山根 淑子

淡雪や郷へ往復切符買ふ
牡丹雪母の見送る蛇の目傘

始まりは東風をうながす風見鶏

楽ひとつ苦も一つあり冬薔薇

切り口にくれなみ零る梅の花

見ればすぐ破りたくなるうす氷

摺り足や女剣士の寒稽古

寒声や日本庭園轟かす

冬夕焼影は荒野に棒サボテン

千人の観客集め餅を搗く

雪はとけ春の日ざしの明るさや

窓からの青空清し春近し

音もなく静かな空や寒明ける

窓一杯の青空よ春となり

寒椿赤く咲いてる空屋かな

地吹雪の中をイベントテント張

白鳥を浮べて淀む最上川

冬紅葉すけてる空の青さかな

寒見舞無沙汰を詫びて声を待つ

節分は一人静かに福を待つ

五月待つ孫の祝ひは仕事始め

隣家より年豆と巻寿司届く

洪 川 東 秋茄子

酒 田 藤波 松山

オハイオ 水谷 直子

アリゾナ 伊吹 之博

高 槻 今井 洋子